

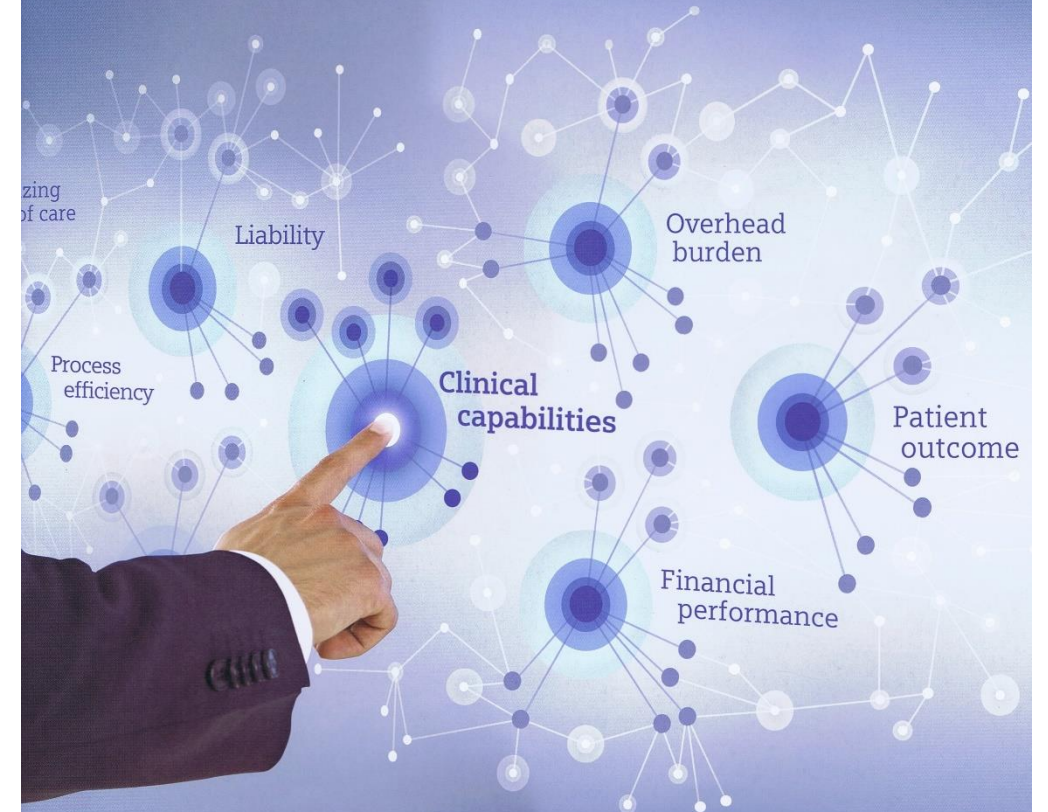
シーメンス社が発行するユーザー向けの機関紙です。

SIEMENS

Siemens Future Vol.28

ヘルスケアソリューションの情報発信誌 ● シーメンス・フューチャー

Volume 28 • Spring 2015



XP

X-ray Products

医療法人 飯田クリニック

所在地：福岡県大牟田市正山町29
主な導入装置：
UROSKOP Omnia



お話をうかがった先生
飯田 如院長

進歩する泌尿器内視鏡手技に対応 大視野FD (フラットディテクタ) 搭載 泌尿器用X線透視撮影装置 UROSKOP Omnia

「身体と精神へ負担の少ない治療」を理念に、泌尿器をトータルにサポートする飯田クリニックは、福岡県大牟田市内に位置する泌尿器科診療・透析クリニックです。同クリニックは、2014年11月17日のリニューアルオープンに際し、泌尿器用X線撮影装置をI.I.を搭載した従来のUROSKOP Accessから、大視野FDを搭載した新型のUROSKOP Omniaへ更新されました。内視鏡下手術使用開始の初日に新クリニックをたずね、導入初期のご感想と将来の展望について飯田如院長にお話をうかがいました。

先生は、いつ頃から泌尿器内視鏡下手術を手がけられていたのですか。

飯田先生 当クリニックは45年前に私の父である現理事長が、大牟田市内で泌尿器科診療と透析を行う有床診療所として開設しました。私は9年前に久留米大学医局から戻ってきたのですが、それ以前の2003年5月から医局に籍を置きながら、旧クリニックにあった古い手術室を改修して泌尿器内視鏡下の手術を行ってきました。

新クリニックを作ろうと思われた経緯をお聞かせください。

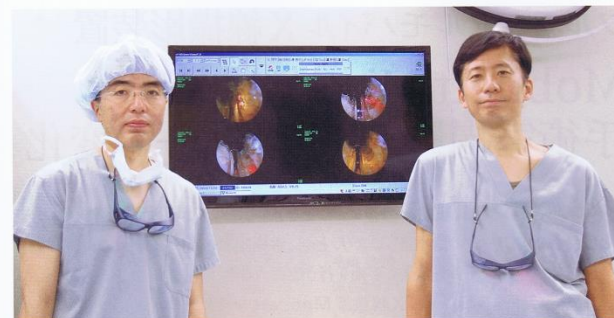
飯田先生 その当時、たまたまアメリカ泌尿器科学会(AUA)の展示会場で見たシーメンスのUROSKOP Accessが、X線透視を行える内視鏡下手術用テーブルとして最適と判断しすぐに導入しました。その後、内視鏡レーザー治療装置なども追加して、経尿道的結石破砕術(TUL)や経皮的腎結石破砕術(PNL)などの内視鏡下手術を行ってきました。今回、手術室、院内全体のスペース、空調、建物老朽化などの問題を解決するために新クリニックの建設を決断しました。

新たなクリニックを作る際に、診療面、スタッフの作業面、建物の設計などについて、どのような配慮をなさいましたか。

飯田先生 クリニックの建て替えにあたっては、医療レベル向上のための機能改善、患者さん・スタッフの快適性・利便性を向上させることを



飯田 如院長



左から、林 眞正先生、飯田 如院長

考慮し、バリアフリーや安全面にも配慮しました。

また、透析には大量の水と電気を使います。いかに水、電気などのエネルギー消費を低減するかという、環境対策への新たな取り組みとして、エコロジー対策を取り入れた設計、建設を行いました。新クリニックではエネルギーを極限まで低減するネット・ゼロ・エネルギー・ビルを目指し、透析用純水(RO水)製造の過程で出る排水を中水として活用し、院内のビオトープやトイレの流水に再利用するシステムを構築しています。

電気についても、すべての照明と空調は人が不在になる時間、場所をコンピュータ制御により自動で電源オフとするシステムを採用しています。エネルギー消費を極力減らし、その使用状況を外来待合室のモニタに表示することで、全館がスマートクリニックとして機能しています。

泌尿器内視鏡下手術の進歩についてお聞かせください。

飯田先生 内視鏡の進歩に伴い、結石治療の分野では、昨今の海外、国内の治療ガイドライン改定により、長径が20mm以上の結石など、体外衝撃波結石破砕術(ESWL)に抵抗性のある結石や上部尿管結石に対しては、尿管鏡によるTULを先行させるように治療方針が変化してきています。さらに、上部尿路結石の治療では軟性内視鏡が採用されるようになり、画像のハイビジョン、高画質化が進んでいます。視野も広く取れますので、結石の破砕には200ミクロン以下の細径ファイバーとホルミウムヤグレーザーを使用した経尿道的結石破砕術(f-TUL)がESWLに代わって普及してきています。私も20年以上前から大学で初期型の軟性内視鏡を使用していましたが、その後は前述の操作性や画質の向上もあり、現在では

一般病院でもf-TULが一般化してきています。

また、前立腺肥大症の治療技術も進歩しています。当クリニックでも、従来の経尿道的前立腺切除術(TURP)では対応できない、たとえば抗凝固剤を使用している出血リスクの高い患者さんに対しても治療が可能な光選択的レーザー前立腺蒸散術(PVP)を本年7月から採用するなど、内視鏡下治療の進歩に対応しています。

導入されたX線透視撮影装置についても、泌尿器内視鏡手術用テーブルとしてのメリットも含め、使用初日のご感想をお聞かせください。

飯田先生 UROSKOP Omniaは、従来の装置に比べてテーブルの高さが低くなり、高さ調整も自由に行えますので、患者さんの乗り降りや麻酔の際に大変使いやすくなりました。今日初めて実際の手術に使用したのですが、新しいFDによるX線画像は透視・撮影画像とも鮮明で、尿路系全



手術室内に設置された「UROSKOP Omnia」

体のKUB撮影画像の大きさと端部が欠けることもありません。画像の観察しやすい点は非常に評価できます。また、画像モニタに切替表示可能な内視鏡画像は、最新の高精細HD画像に対応しており、表示される画像が従来のものに比べて鮮明なことに驚きました。

今後、この装置をどのように使おうとお考えですか。

飯田先生 今後は、すぐれたX線・内視鏡画像表示機能とより低く使いやすくなったテーブル調整機能などを利用して、低侵襲な内視鏡下手術を行っていきたいと思います。さらに血液透析の分野でもシャントPTAなどの手技に使用していきたいと考えています。

クリニックの今後の展望についてお聞かせください。

飯田先生 当クリニックでは患者さんの治療法について、希望に沿ったテーラーメイド医療を考えています。短期間の入院で最大限の効果を生む方法で対応したいという思いがあります。さらに、大きな手術を必要とするようなケースではすみやかに対応可能な病院を紹介するなど、病院と診療所間の連携あるいは診療所間の相互連携を進めていこうと考えています。

将来的にはこの地域で、基幹病院と患者情報などの情報交換と共有が行えるよう、安全性を確保したうえで、電子カルテの相互利用が可能となるような情報インフラを導入していきたいと考えています。

(2014年11月18日取材)

新クリニックにおけるわれわれの医療に対する取り組みと将来の展望について書かれています。